



岡田 莊司氏

平成三十年度の國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会は、岡田莊司氏（國學院大學神道文化学部教授）をお招きして、平成三十年十一月十七日に本学常磐松ホールで行われた。

演題は、「古代と近代の大嘗祭と祭祀制」であった。

本年度、「大嘗祭」をテーマとしたのは、平成三十一年五月一日に御代替わり、即位が予定され、十一月十四日には大嘗祭が予定されているためである。また、國學院大學博物館では、企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」が行われて

昭和天皇の大嘗祭が行われた昭和三年（一九二八）、國學院大學の教授であった折口信夫は、『國學院雜誌』などに大嘗祭に関する研究を発表し、またその後、主著である『古代研究』に、「大嘗祭の本義」を取

いた（詳細は十二頁参照）。はじめに―三十年前の論議

概要

岡田氏は講演にあたり、平成二年（一九九〇）の大嘗祭について、当時論争が行われたことなどを回想し、その頃で作成した大嘗宮神殿内（悠紀殿・主基殿）の平面図を用いて祭儀の中心となる神饌供進や大嘗宮神殿の内部構造について概説した。

大嘗宮神殿の内部には二つの神座がある。第一の神座（寢座・御衾）は中央にあり、その東側（京都で行われる場合）にも、第二の神座がつくられる。天皇の御座は、その前に東南（伊勢神宮の方向）に向かって敷かれる。平成二年の論争は、この神座をめぐるものであった。

昭和天皇の大嘗祭が行われた昭和三年（一九二八）、國學院大學の教授であった折口信夫は、『國學院雜誌』などに大嘗祭に関する研究を発表し、またその後、主著である『古代研究』に、「大嘗祭の本義」を取

公開学術講演会
「古代と近代の大嘗祭と祭祀制」

岡田 莊司（本学神道文化学部教授）

國學院大學
研究開発推進機構
機構ニュース

Vol.12 No.2
発行人 根岸 茂夫
編集人 大東 敬明
〒150-8440 東京都渋谷区東 4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0104
FAX (03) 5466-9237

目次

- ◆ 公開学術講演会
 - 「古代と近代の大嘗祭と祭祀制」…………… 1
 - ◆ 第四十四回日本文化を知る講座
 - 「倭・日本における漢字文化の受容と国家形成―古代文房具の考古学的研究から―」…………… 3
 - ◆ 国際研究フォーラム
 - 「アジアの宗教文化―モタニテイの中の相互変容―」…………… 5
 - ◆ 私立大学研究フロンティア事業平成三十年国際シンポジウム
 - 「古事記と『国家』の形成―古代史と考古学の視点から―」…………… 7
 - ◆ 私立大学研究フロンティア事業
 - 「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ―」…………… 8
 - 「古事記」の先端的研究・教育・発信―事業報告―…………… 10
 - ◆ 平成三十年度共存学公開研究会
 - 「多文化共存をめぐる伝統と開発―中国と日本の事例から―」…………… 11
 - ◆ 博物館特別展「キリシタン―日本とキリスト教の469年―」…………… 12
 - ◆ 博物館企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」…………… 13
 - ◆ 國學院大學博物館活動報告…………… 14
 - ◆ 資料紹介「大嘗会御神殿絵図」…………… 16

録した。この中で、折口は『日本書紀』にみえる瓊瓊杵尊が「真床追衾」にくるまれて天孫降臨されたことと、大嘗宮の第一神座とを結びつけ、天皇が神の靈威を受けるといふ新しい学説を出した。

しかし、第一の神座で何らかの「秘儀」が行われたということについては、各時代の記録を見ても一切ない。天皇が御座から伊勢神宮のある東南の方向に向かって、神饌を差し上げるのが、古代祭式の最も重要なところではないかと岡田氏は論じた。しかし、もっと何か呪術的なことがあるのだらうと多くの反論があり、それが論争となった。

・ 神道史の特質と祭祀権

神道の歴史を古代から現代まで俯瞰すると、

【古代】

I 地域・氏族祭祀論（神社祭祀）氏族社会

II 国家・天皇祭祀論（皇室祭祀）祭祀権の二重構造

【平安・中世以降】

III 神仏関係論

IV 人霊祭祀論

V 古典籍継承論（社家の学問・国学）

↓ 皇典講究所・國學院大學（國學院神道）

の五つの重要な要素があったとした上で、古代から明治維新まで一貫して、地域は地域で祭祀を行ってきた。このように地域のことは地域で行い、国家的な祭祀は天皇祭祀として、中断や復興などはあるが、基本的には二重構造の形式で明治を迎えたと指摘した。

・新嘗祭と大嘗祭の論議

大化の改新以前から、新嘗祭は三輪山周辺の天皇の直営田から収穫された米や粟を用いて行われていた。大嘗祭は、この新嘗祭を源流として成立している。

神社・神道の祭祀の起源は明らかでない部分が多いが、古代から近世・近代・現代までの国家的祭祀の流れを、大きく分類すると、

・三・四世紀からの神殿や宮殿、居館といったところで行われた祭祀(天皇祭祀権)。

・山・滝といった自然景観を背景に行われた祭祀(地域・氏族祭祀権)。

の二系統がある。前者は大嘗祭を中心とする天皇みずからが祭る祭祀の系統、後者は律令国家が神社に幣幣を奉る、あるいは明治四年(一八七二)から行われた明治国家が官国幣社へ使者を派遣するという系統である。

この二つ(二重構造)が神道史の流れの中心であって、一回は七世紀後半の律令国家の成立期、もう一回は明治初年以降の明治国家において出来あがってくるとし、その二つの流れに、どのような連続があるのかという本質・本義を探り出すということを進めたいとした。

・古代の祭祀制と新嘗・大嘗祭

新嘗祭と大嘗祭の大きな違いは、新嘗祭が天皇の直営田で収穫された米を用いるのに対し、大嘗祭は畿内以外の地域からの米が用いられる点である。天武天皇二年(六七三)の大嘗祭では、播磨国(兵庫県)・丹波国(京都府)から米が奉られており、後の大嘗祭の行われ方と共通し

ている。次の持統天皇は、持統天皇四年(六九〇)に即位し、同五年に新嘗祭を行った。これが一代一度の大嘗祭となる。

大嘗祭における米の重要性は、これまでにも述べられてきたが、新嘗祭・大嘗祭では、粟も奉られ、天皇も米とともに召し上がるのが重要である。古代国家も人心の安定のため、稲のご飯が十分整えられない場合には、粟のご飯を用意した。その祭祀が現在に繋がっているという。このため、新嘗祭にも大嘗祭にも、米のご飯とともに、粟も用意されることとなる。

また、岡田氏は新嘗祭・大嘗祭で祭られる神については議論があるが、古くは天照大神のみであったとした。天皇は、全国の神々を直接祭ることは本来的に行えない。これは地元の祭祀が最優先であるためである。天皇は天照大神だけを直接お祭りすることができた。

・近代の祭祀制と大嘗祭

古代から続く大嘗祭は、文正元年(一四六六)に行われた後土御門天皇の大嘗祭を最後に一度、中断する。江戸時代に入り、東山天皇の父である霊元上皇が祭祀に強い意思を示され、貞享四年(一六八七)に東山天皇の大嘗祭が行われた。その後、中断があったが、桜町天皇の元文三年(一七三八)に復興されて以降、現在まで大嘗祭は継続している。

明治天皇の大嘗祭は、明治四年(一八七二)に行われた。古代の形式を踏襲したと見てよいが、大隈重信・西郷隆盛・板垣退助らが参列し、また、古代では卜部氏が担って

いた役を明治初期の神祇行政の中心にあった福羽美静が担うなどの変化があった。

一方で、明治時代のはじめには、神籬を設け、そこに神を迎えて祭祀を行うという新たな方法が、宮中の祭祀でも行われるようになる。その先駆けとなったのが、五箇条の御誓文の時の祭祀である。

それまでは、遠くの神を遥かに拝み祭る(遥拝)ものであったので、この変化は大きいと言える。また、天皇が直接祭祀を行う(親祭)対象は、古くは天照大神のみであったが、全国の神々もその対象になっていった。例えば、宮中三殿(賢所・皇霊殿・神殿)のうち、神殿は、古代から神祇官が祀ってきた八神殿の神々と全国の神々とを明治以降に新たにあわせて祀ったものであり、これも、天皇が直接全国の神々を祀るという新たな発想であった。このような変化は明治二〜五年の流れの中

で起こっていく。明治時代以降の新しい祭式作法としては、御扉を開き、警蹕をかけるなど、神の降臨を確認し合うというものがある。

一方で、大嘗祭及び古代の祭祀に、神迎えの作法はなく、遥拝が基本である。

大嘗祭では、悠紀殿と主基殿それぞれに神座が設けられる。これらは同時並行的に行われ、現在は掌典長と掌典が設営し、神殿内に明かりをとす。鎌田純一『平成大札要話』(錦正社、二〇〇三年)では、それをもって神様がいらっしやったと認識している、とする。

大嘗宮内に来臨を見立てる座は用意するが、あくまでも天照大神は伊勢に鎮座されている。

おわりに―古代と近代の比較

律令体制下において、新たな祭祀システムは天武朝(七世紀)に形成される。この時期と明治元年の戊辰戦争から同四・五年の流れは似ている。これら、天武天皇の新嘗祭(古代)と明治天皇の大嘗祭(近代)とを比較すると、どちらも戦乱の後であり、また、天武天皇五年・明治四年には大祓と大嘗祭とが連動して行われている。さらに両者ともに畿外の米を用いている。

同年五月には、「神社ノ儀ハ国家ノ宗祀」であることが宣言され、別々であった天皇と地域神社とが大きな体系として確立していく方向性が明確になった。

明治神宮には明治四年の大嘗祭に際して、官国幣社に奏上した祝詞の文案と祭式次第を記した版木が残されている。明治四年五月十四日の太政官布告により、神社制度の改革がなされた。これにより、地域の有力な神社は官幣社・国幣社と定められた。大嘗祭に際してはこれらの神社に幣帛が奉られた。これは、古代の官社制度と対応できる明治の官社制度の始まりである。これも直轄祭祀の形成であった。

このように神道の学問では、古代と近代は関連しているのが、古代研究者は近代を学び、近代研究者は古代を学ぶことで、國學院大学の神道は風通しの良い神道を目指すべきであろうとまとめられた。

(文責・大東敬明)

第四十四回日本文化を知る講座

「倭・日本における漢字文化の受容と国家形成」
—古代文房具の考古学的研究から—

國學院大學研究開発推進機構 第44回 日本文化を知る講座

—古代文房具の考古学的研究から—

倭・日本における漢字文化の受容と国家形成

—古代文房具の考古学的研究から—

日時 | 平成30(2018)年6月2日(土) 13:00~16:45

会場 | 國學院大學渋谷キャンパス常松ホール(芸術メディアセンター棟1階)

講師 | 國學院大學博物館 准教授 深澤太郎

協賛 | 國學院大學 国文学研究資料館 国史館 国史資料館 国史資料館 国史資料館

お問い合わせ | 03-3463-1111

国學院大學

講座の概要

言葉は空気を震わせて虚空に消え、文章を記した木や紙も儂く形を失っていく。しかし、石製・陶製であるために腐朽することがなかった硯は、東アジアを中心とした「漢字文化圏」における文字利用の普及と展開を考える際に、非常に有用な考古学的物証とすることができよう。日本列島に生きた倭人たちも、中国・朝鮮の国々と交わる中で、複数回にわたる漢字文化の波を受けている。

平成三十年(二〇一八)六月二

日(土)に國學院大學渋谷キャンパス常磐松ホールを会場として開催した当講座では、中国の古代文房具について瞥見した上で、徐々に漢字というツールを導入してきた倭人たちが、最終的に律令国家の完成を迎えるまでの道程を検証した。その中心となるテーマは、元國學院大學博物館長の故吉田恵二教授が取り組んできた古代文房具研究である。

なお、講座の開催にあわせ、吉田教授の遺著である『文房具が語る古代東アジア』が同成社より刊行され、ご家族から國學院大學博物館に

中国・日本の硯関係資料が寄贈された。

以下、発表と討論の要旨を併せて掲げておくが、あくまで筆者の理解を取りまとめたものであり、各発表者の本意を漏らさず汲み得たものとは限らない。ご寛恕を請う次第である。

「東アジアにおける漢字文化―倭人と漢字の二〇〇〇年―」深澤太郎(國學院大學博物館 准教授)

冒頭、深澤より講座の趣旨を述べ、「漢字」と「東アジア」という

地域の成り立ちや、中国における古代文房具に関する吉田氏の研究について、そのあらましを振り返った。

また、倭人たちが文房具―漢字文化―を受容してきた階梯について、漢

の長方形板石硯に類似する板石硯が出現した弥生時代、中国・朝鮮諸国と通交しつつも明確な文房具の出土に乏しい古墳時代、朝鮮半島の影響を受けて硯の国産が始まった飛鳥時代、そして遣唐使などを介して中国

の漢字文化を直接摂取するようになった奈良時代以降の四波に区分して概説。但し、日本最古の定形硯である圈足円形硯に、硯面外周が隆起する事例が含まれている一方で、かかる形態を呈する類例が中国・朝鮮半島においても渤海期の八世紀代まで降ってしまう点に資料上の課題を残している。

その上で、柳田氏が報告した朝鮮半島南部と倭における「板石硯」が、中国出土例と異なり不定形を呈している理由を問うとともに、日本出土硯の淵源を追及するためには、中国

東北部から朝鮮半島北部の検討が欠かせないことを指摘した。

「弥生時代の長方形板石硯―漢帝国と北部九州のクニグニ―」柳田康雄(國學院大學博物館 客員教授)

続いて柳田氏は、弥生時代から古墳時代前期の「板石硯」を取り上げ、福岡県糸島市三雲・井原遺跡、福岡市雀居遺跡、筑前町薬師ノ上遺跡、筑前町東小田中原遺跡、島根県松江

市田和山遺跡出土例に加え、複数の新発見資料を紹介した。当該「板石硯」は、法量的に漢代の長方形板石硯と同様のものとして大過なく、材質としても違和感がない。

また、これらの硯が、当時の対外交渉における中樞を担ったイト国を中心に見られることや、国産鏡の銘文などを検討した結果から、弥生時代中期以降の北部九州に硯を使用する人々が存在したとする。吉田氏は、前漢晚期以降に長方形板石硯の遺例が増加すると指摘していたが、このタイミングで北部九州に硯が現れたのも偶然ではない。そして、朝鮮半島南部と倭における「板石硯」が不定形であることに關しては、む



柳田康雄氏



古谷毅氏

しる地元で生産された結果と解釈し、それだけ文字の普及が進んでいたものと評価した。

「古墳時代の漢字文化―国家形成期における文字と金石文―」古谷 毅（京都国立博物館 主任研究員・國學院大學博物館 客員教授）

古墳時代に関しては、明確な文房具の出土が知られていないものの、埼玉県行田市埼玉稲荷山古墳出土鉄剣、熊本県和水町江田船山古墳出土鉄刀、鳥根県松江市岡田山一号墳出土鉄刀などのように、少なからぬ金石文が遺されている。その内、江田船山古墳出土大刀の銘文を分析した古谷氏は、中央豪族に仕えた地方豪族の下に、刀を製作する技能集団や、文章を撰文する渡来人の存在がうかがえるとした。中国南朝などと通交する際も渡来人に依存していたとみられ、倭人が主体的に漢字を用いるようになるのは、七世紀を俟たねばならなかったのである。

倭国において、前方後円墳が消えていくと同時に文房具が受容されていく様には、文字を必要とせず成り立っていた古墳社会から「離脱」していく過程を見出すことができる。

「朝鮮半島の国家形成と文房具―日本・中国との関係から―」山本孝文（日本大学文学部 教授）

木簡からうかがわれる墨書の普及や、陶硯をはじめとする文房具の生産は、百済・新羅における身分制改革や地方統治組織の画期と連動していた。また、当該地域の文房具を実地に検討した山本氏は、陶硯・石硯の形態的特徴から、その祖形が何処に求められるか分析し、百済・新羅が、それぞれ中国南朝と隋唐をモデルにした硯を用いた背景に、相互の政治的な関係性がうかがわれるとした。そして、文字文化の伝播は、単なるモノの伝播と異なり、特定の社会制度や思想の伝播と密接なものであることを指摘した。

なお、朝鮮半島においても、前一世紀から五世紀頃まで文房具が消える時期があり、日本列島の様相とも連動しており興味深い。また、現状では、本格的な硯より、木簡の出現が時期的に古くなっているが、半島における転用硯の研究は進んでいない。定形硯出現以前の実態は、半島・列島ともに考えていくべき大きな課題であろう。

「日本古代の陶硯と文書行政―国家の完成と文房具―」青木 敬（國學院大學文学部 准教授）

青木氏は、主に宮都出土の事例を取り上げ、藤原京期に施設の格式に応じて硯種と使用階層の規定が確立した可能性を指摘する。かつて吉田

氏が指摘していた通り、平城宮においては、蹄脚円面硯が権力の象徴と位置付けられていたが、顕微鏡で硯面を観察した結果からも、頻繁に使用されたとは考えにくいことが明らかとなった。一方、地方官衙の蹄脚円面硯は、極めて希少である。また、甕転用硯は、多くが手のひらサイズであり、出土地付近に現業部門の官衙が存在した可能性が高い。このように、硯種の検討から、使用者の階層や、出土遺跡の性格が明らかになることを指摘した。

また、古代末以降の硯は、石製へと変化していくが、石製硯の硯面を精緻に観察すると微妙な凹凸が認められる。このような凹凸が、墨の磨り味に反映するとも言われており、このような微細な研究も求められていくだろう。加えて、現在分離している陶硯研究と石硯研究の接近も、今後の課題として取り上げることができる。

「討論」コメンテーター… 梶山林 繼（國學院大學 名誉教授）

当講座は、例年四日間に亘って開催してきたが、今年新たな試みとしてシンポジウム形式を採用し、梶山林 繼 名誉教授をコメンテーターとして討論を行った。時間が不足していたため、各発表者から補足説明を加えたに止まったが、質疑の概要については、煩を避けるため右の発表要旨に集約しておいた。

梶山氏は、今日に至るまで漢字を上手に利用しているのは、日本文化の特質と指摘。漢字文化を問う上では、硯のみならず、墨や文字そのものの研究も欠かせないとした。また、万葉考古学を唱える立場から、



『万葉集』に見える大伴家持の詩についても紹介。存命であれば、吉田氏が先導したであろう文房具研究には、更なる展開の可能性が開けており、後続の研究に期待して結びとす。

（文責・深澤太郎）

国際研究フォーラム

「アジアの宗教文化

——モダニティの中の相互変容」

平成三十年(二〇一八)十月二十日(土)、研究開発推進機構日本文化研究所の主催により、国際研究フォーラム「アジアの宗教文化——モダニティの中の相互変容 Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities」が開催された。

近現代のアジアは、それぞれの国や社会、あるいは地域において固有の modernity (その意味でそれは複数形の modernities であることとなる)を経験してきているが、その歴史的展開を受けて、宗教文化もまた変化を遂げてきている。

他方で、その変化は必ずしも内的な要因からのみ生じたわけではない。メディアや技術の発展とも結びついて、宗教文化は様々な形で越境してきたのであり、かつそれによって相互に影響を与えながら変容してきたのである。

本フォーラムは、このような越境や相互変容といったことを基本的な視点として、近現代のアジアにおける宗教文化について報告を行い、ワークショップ的な形で議論を深めることを目指して開催されたものであった。

また本フォーラムは、国際学会での発表経験がない若手研究者が、その前のステップとして英語で発表・議論する機会を提供することも一つの目的としていた。学内外に広く報

告者を募り、最終的には様々な国籍・専門分野の十二名が報告を行った。以下、報告の概要を記す。

基調講演 (Keynote Lecture)

ラインハルト・ツェルナー氏(ボン大学)の基調講演は「ええじゃないかと日本における宗教的モダニティ *Eejanaika* and Religious Modernity in Japan」という題で行われた。ツェルナー氏は「ええじゃないか」という歴史上の出来事について、神札と祝祭を基本的な要素とし、多様なカミヤや仏などが関わるものとして描かれていたこと、またある種の富の再配分として機能していたことなどを指摘した。続けて「ええじゃないか」から近世・近代の日本の宗教の型を検討するとし、前者ではより個人的な「私」と、より共同体的な「私たち We」の多様な宗教実践が併存していたとしたのに対して、後者では、とりわけ国家との関わりにおいて「私たちの一員と



ラインハルト・ツェルナー氏

しての私 *as part of We*」に宗教実践が一元化され、ある宗教伝統がそれを排他的に担うことが前提とされると論じ、更にこうした変化を東アジアの文脈において横断的に検討することが可能ではないかと述べた。

セッション1: 日本の新宗教とアジア (Session 1: Japanese New Religions and Asia)

セッション1ではまず三浦隆司氏(アメリカ・アリゾナ大学)の報告、「大本の御筆先におけるアジア像 *The Vision of Asia in Omoto's Oudesaki*」が行われた。三浦氏は、近代日本の宗教運動が日本とアジア・世界との関係をいかに概念化したのかという問題意識から、大本の出口なおの「御筆先」と出口王仁三郎の著作を取り上げ、アジアに対する民族中心主義と霊的博愛主義という二つの対照的な表現の関係について論じた。

続いて黄約伯氏(台湾中央研究院)は「戦後台湾における天理教の文化内受容 *The Inculturation of Tenrikyo in Postwar Taiwan*」と題して、天理教が一九六七年から台湾で行ってきた布教活動を取り上げて報告を行い、戦後の台日関係や、天理教が政治的・社会的・医療的側面から台湾人に対して持ちえた魅力といった観点から分析を行った。

セッション2: 日本のナショナリズムと想像の「アジア」(Japanese Nationalism and Imagined "Asia")

セッション2では最初にダーヴィッド・ヴァイス氏(立教大学)による報告、「日本の起源神話——近世日本のアイデンティティにおける中国理解の変化とその影響 *Founding Myths of the Japanese State: The Changing Perception of China and its Influence on Early Modern Japanese Identity*」が行われた。ヴァイス氏は近世初頭の日本の儒者が唱えた呉泰伯論が、やがて国学者らによって批判され、天照大神と天皇の血統を中心とする新たな建国神話が求められていく過程について考察した。

齋藤公太(國學院大學研究開発推進機構)は「漢意の変容——明治国学における後期水戸学の思想の受容 *The Transfiguration of Karagokoro: the Reception of the Mito School Thought by National Learning in the Meiji Period*」と題して、国学批判を含んでいた後期水戸学の思想が、明治期以降国学者たちに受容されていった過程とその背景について報告した。

西田彰一氏(日本学術振興会)は「満州における寛克彦の活動 *Activities of Kakehi Katshiko in Manchuria*」と題して報告を行った。寛克彦は独自の神道哲学で知られる人物だが、満州国で自らの思想を広めようとした活動は失敗に終わった。寛の言説が現地の人々や日本の政府の官僚に受け入れられなかった背景について西田氏は考察を行った。



セッション3：日本宗教をめぐる 様々な焦点 (Session 3: Various Focuses about Japanese Religions)

セッション3の最初の報告は高瀬航平氏(東京大学大学院)の「近代日本の宗教文化における記念碑の意義 Significance of Monuments to Religious Culture of Modern Japan」であった。高瀬氏は一八七〇年代に海外から日本に輸入された「記念碑」が、当時の社会的状況における「宗教」との関わりの中で果たした役割について論じた。

次にマテヤ・ジャビエク氏(筑波大学大学院)が「日本の武道と宗教の関係の再検討——三峯山と極真空手のケーススタディ Reconsidering the Relationship between Japanese Martial Arts and Religion: Case Study of Mt. Mitsumine and Kyokushin Karate」と題して報告を行った。近代格闘技は宗教的伝統を必ずしも必要としないが、実際にはそのような伝統が格闘技の日常実践の中で依然として意味を有している。ジャビエク氏は極真空手や三

峯山の関係を具体例として取り上げ、その意義について考察した。

グエン・トゥ・ハン氏(ハノイ国家大学)は「日本における土地神信仰——ヴェトナムとの比較 The Worshipping of the Tu Di Gong in Japan: A Comparison with Vietnam」と題して、日本の神道の中でも特に人々の間で広まっている土地神への信仰を、ヴェトナムの事例と比較して考察を行った。

セッション4：アジアの宗教文化 における現代の諸問題 (Session 4: Contemporary Issues in Religious Cultures in Asia)

セッション4ではまず阿部哲氏(長崎大学)が「環境をめぐるイスラムの議論——現代イランにおける宗教的原理の検討 Islamic Debates on the Environment: An Examination of Religious Rationales in Contemporary Iran」と題して報告を行った。イランで近年環境問題をめぐって行われている宗教指導者の議論において、近代科学との関係の中でイスラムの教えがいかに解釈されているかを検討するものだった。

次に伍嘉誠氏(長崎大学)が「香港で日本仏教と中国民俗宗教が出会う時——中国的環境における創価学会の表象と解釈 When Japanese Buddhism and Chinese Folk Religion Meet in Hong Kong: Representation and Interpretation of Soka Gakkai in the Chinese

Settings」という報告を行った。呉氏によれば、香港の創価学会は「随方毘尼」という原則に基づく解釈を行うことで、儒仏道の三教一致などを特色とする香港の文化に合わせた布教を実現しているという。

最後にムン・ビョンジュン氏(ソウル大学)が「動員のための時代区分——『韓国新宗教』の宗教的時代区分との比較における『第四次工業革命』言説の言説論的分析 Periodization for Mobilizing: Discursive analysis to “the 4th Industrial Revolution” Discourse in Comparison with Religious Periodization in “Korean New Religions”」と題して報告を行った。近年韓国の社会経済的言説の中心的地位を占めている「第四次工業革命」論を取り上げ、「時代区分」の

言説が持つ人間や資源の「動員」としての機能と、その意味論的基礎について論じたものであった。

結びの言葉 (Concluding Remarks)

すべてのセッションが終わった後、司会を務めた櫻井義秀氏(北海道大学大学院)が結びの言葉を述べた。櫻井氏は「アジアの宗教文化——モダニティの中の相互変容」という主題をめぐり、フォーラム全体を通じて得られた重要な知見として、アジアにおける「文明」の国としての中国の意味や近代日本における記念碑の利用を挙げ、外国のイメージを参照することや時代区分を用いることがモダニティの二つの戦略として考えられると指摘した。

本フォーラムには延べ三十七人が参加し、各報告の後には英語での活発な議論が交わされた。平成三十一年度には本フォーラムの報告書も刊行される予定である。

(文責・齋藤公太)



私立大学研究ブランディング事業平成三十年度国際シンポジウム 「古事記と「国家」の形成—古代史と考古学の視点から—」

平成三十年十一月三日(土)、宮崎県立西都原考古博物館(宮崎県西都市)にて、平成三十年度国際シンポジウム「古事記と「国家」の形成—古代史と考古学の視点から—」が開催された。本シンポジウムは私立大学研究ブランディング事業の中間総括のシンポジウムに位置づけられ、宮崎県共催、西都市・宮崎県神社庁後援のもと開催された。登壇者等は以下の通りである。

パネリスト

谷口雅博(本学文学部教授・古事記学センター長)

サイモン・ケイナー(英国・セインズベリー日本藝術研究所総括役所長)

笹生衛(本学神道文化学部教授・國學院大學博物館長)

佐藤長門(本学文学部教授)

コメンテーター

李永植(韓国・仁済大学校歴史考古学科教授・同大学校博物館長)

デイスカッション

長友安隆(青島神社宮司・宮崎県神社庁講師)

デイスカッション司会

山崎雅稔(本学文学部准教授)

総合同司会

渡邊卓(本学研究開発推進機構助教)

開会にあたり、主催の國學院大學からは、石井研士氏(本学神道文化学部教授・副学長)、共催の宮崎県

からは、鶴田安彦氏(宮崎県総合政策部次長)、後援の西都市と宮崎県神社庁からは、押川修一郎氏(西都市長)と本部雅裕氏(宮崎県神社庁長)が挨拶を行った。

各発表では、谷口氏が、「古事記」と国家の形成」と題して、「古事記」に記されている国家形成と史書編纂の動機について触れた。「日本書紀」と「古事記」の二つ史書が同時期に成立したことについて、「日本書紀」が国内外に正格漢文の史書が成立したことを示すために作られたのに対し、「古事記」は、系譜意識が強いため、皇位継承の正当化を目的として作られたのではないかと述べた。

サイモン氏は、「考古学と神話の間—最近の発掘調査の成果から見た英国の国家形成—」と題し、近年のイギリスでの発掘調査の成果を紹介しつつ、五世紀頃にローマ帝国が崩壊したことに伴い、国家意識が芽生えたことを指摘した。現在残る「アーサー王伝説」はこの頃の史実が基になっているのではないかと述べた。

笹生氏は、「国家形成と鏡・刀剣—宝鏡・神剣の原形と歴史的展開—」と題して、三世紀から五世紀、そして、六世紀において、日本の鏡・刀剣の装飾や形状が中国の影響を受けながら変遷していったことに言及し、これらが日本の大王と首長の関係性に重要な役割を果たしている

たことを指摘した。日本では、五世紀頃に国家意識が生まれたのではないかと述べた。



佐藤氏は、「古代国家の形成と修史事業」と題し、「日本書紀」に記された七・八世紀における律令国家の成立と史書の編纂事業の動向とともに、「古事記」の内容に言及し、男性天皇の相次ぐ早世のため、女性天皇から男性天皇への即位の正当性の保証が「古事記」の内容にも反映されているのではないかと述べた。

李氏は、「九州南部の天孫降臨神話と加耶」と題し、韓国の考古史料や文字資料などを紹介しつつ、日本・中国などの周辺国との交流関係の中で、五世紀頃の朝鮮半島においても、国家形成と史書編纂の動きがあったことを指摘した。

つづくデイスカッションでは山崎氏が司会を務め、パネリストの谷口氏、サイモン氏、笹生氏、佐藤氏、コメンテーターの李氏、デイスカッションの長友氏が登壇し、討議が行われた。

まず、聴衆代表の長友氏から、西都原古墳群の発掘史や宮崎と百済との関係についてのコメントがあった。その後、登壇者による文学・史学・考古学の学問の分野を超えた討議がなされた。五世紀に、東アジアで大きな影響力を持っていた中国、そしてヨーロッパで大きな影響力を持っていたローマ帝国という巨大な国家が転換期を迎える中で、アジアでは日本・韓国、ヨーロッパでは英国において国家意識が芽生え始めたことまたそれに伴って史書編纂の源流が形作られていくという指摘があり、「古事記」の成立や国家形成の動向を世界的なレベルで捉え直せる可能性についても言及があった。

本事業において初の学外開催の国際シンポジウムであったが、事前の広報活動や各種メディアに取り上げられたことにより、当日は二二六名の来場者があった。同日は会場周辺では西都古墳祭りも開催されていることもあり、非常に盛況なシンポジウムとなった。神話のふるさとと称される宮崎県にて、中間総括に相応しい学際的・国際的なシンポジウムを開催することができた。

(文責・渡邊卓)

私立大学研究プランディング事業
「古事記学」の推進拠点形成
「古事記」の先端的研究・教育・発信―事業報告

事業の目的と概要

本センターは、本学が平成二十八年度文部科学省「私立大学研究プランディング事業」(タイプB・世界展開型)に、「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ「古事記」の先端的研究・教育・発信―として選定されたことに伴い設置され、年次計画に基づきながら事業推進を行っている。

本センターでは、皇典講究所の創立以来、継続して行われてきた「古事記」研究を継承・発展させた事業を展開しており、日本文化の新たな創造と発展に寄与していくことを目的としている。

平成三十年度の事業報告

本年度の全体目標として以下のものを掲げた。

・事業全体の中間的総括
 〈研究〉「中間総括国際シンポジウム」の開催

〈教育〉教育実践の試行
 〈発信〉多様なメディアによる情報発信

これらの目標に対して、以下の個別の事業計画を推進した。

①学内定例研究会の実施

事業を支える定例研究会は、AMC棟会議室〇六にて、七回(十六時〜十七時三十分)開催した。研

究会は、「古事記」の本文校訂・註釈の検討、教員・研究員による発表・報告で構成される(以下、敬称略)。



学内定例研究会の様子

○第一回(四月二十五日)

・「古事記」の本文校訂23「須賀の宮①」(谷口雅博)

○第二回(五月三十一日)

・「南開大学との研究連携協議および中間総括国際シンポジウムに関する報告」(渡邊卓)

・「古事記」の本文校訂24「須賀の宮②」(谷口雅博)

○第三回(六月二十七日)

・「古事記」総合データベースの現状報告(井上隼人・中山陽介)
 ・「古事記」の本文校訂25「稲羽の素戔」(谷口雅博)

○第四回(七月二十五日)

・「古事記」に見られる神社関連地名と呼称と社名表記について(藤本頼生)

・「古事記」の本文校訂25「稲羽の素戔」(谷口雅博)

○第五回(十月十七日)

・「古代祭祀と鏡―古代祭祀の立場から―」(笹生衛)

○第六回(十一月二十六日)

・「古事記」の本文校訂26「八十神の迫害」(谷口雅博)

○第七回(十二月十九日)

・「古事記学マップについて」(井上隼人)

②「中間総括国際シンポジウム」(宮崎県)の開催

十一月三日(宮崎県立西都原考古博物館にて、国際シンポジウム「古事記と「国家」の形成―古代史と考古学の視点から―」(宮崎県共催、西都市・宮崎県神社庁後援)を開催した。

パネリストとして、本学から谷口雅博、笹生衛、佐藤長門の三名、海外からサイモン・ケイナー(イギリス・セインズベリー日本藝術研究所)が登壇し、また、コメンテーターとして李永植(韓国・仁済大学校)、デイスカッサントとして長友安隆(青島神社宮司)が登壇した。

本研究事業では初となる学外シンポジウムであったが、二二六名の聴衆があった。なお、本シンポジウムの詳細については七頁参照。

③共通教育科目「古事記学」の開講
 昨年度にひきつづき平成三十年年度後期科目として「國學院の学問(古事記を諸分野から読む)」(金曜四限)を開講し、本研究事業に携わる教員(谷口雅博、武田秀章、笹生衛、佐藤長門、平藤喜久子、松本久史、渡邊卓)が、学問分野の枠を超えてリレー形式の講義を行った。履修者数は一七三名であった。

④外部機関と連携した学際的・国際的ワークショップの開催

本年度の学際的・国際的ワークショップは、以下のとおりである。
 ○中国・南開大学との学術交流会議および講義

五月十三日〜十五日に、本センターの渡邊卓が本学の海外協定校である南開大学へ訪れ、今後の研究連携についての協議、南開大学外国語学院日本語文学科の院生研究会へ参加した。また、同大学東アジア文化研究センター主催の講演会にて、「古事記」の説話―神祇と神語―と題した講演を行った。



講演の様子

○ハーバード大学ライシャワー日本文化研究所でのワークショップ開催

九月二十一日に、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本文化研究所でワークショップ「古代日本の神話と儀礼」が開催された。

本センターから笹生衛、平藤喜久子、渡邊卓、本学学術資料センター神道資料館部門から大東敬明、木村大樹が登壇した。笹生は、考古学の成果に基づいて新嘗・大嘗祭の原形について講演した。平藤は、神話学におけるスサノオ論争などから近代の儀礼についての神話の扱いについて発表した。渡邊は『古事記』に描かれる制度化以前の儀礼について文学的立場から発表した。



ワークショップの様子

○人間開発学部十周年記念事業

十一月十日に、たまプラーザキャンパスにて人間開発学部十周年記念事業が開催された。本センターとの共催で行われた浅野温子の特別授業「日御子 イワレビコとイツセ、東渡邊卓が司会を務め、『古事記』の神武東征について解説を行った。

⑤ データベースの公開

平成二十九年度から公開している神名・氏族データベースについては随時情報を更新している他、検索の利便性を高めるために追従式の索引をつけ、視認性を高めるために背景の色を変更した。氏族データベースにはさらに、カバネ総記を設け、該当氏族を下部に配置し、各氏族の性格が把握しやすくなるようにした。また、本年度より新たに地名・宮都・陵墓・神社データベースを作成した。各土地の情報と共に地図を一緒に表示させることで比定地を把握しやすくした。また、項目ごとに都道府県自治体や観光協会が作成する観光案内、神社の公式ホームページのリンクを貼ることで利便性を高めた。これらは後掲⑦の古事記関連アプリと連動させ、比定地をめぐる際のガイドとしての用途も想定している。

⑥ 『古事記』入門書の刊行

谷口雅博執筆の『古事記の謎をひもとく』（弘文堂、平成三十年四月）が刊行された。

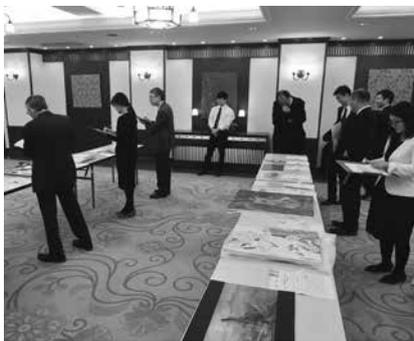
⑦ 『古事記』関連アプリの公開

『古事記』関連伝承地のアプリケーション「古事記学マップ」を作成している。前掲④で掲げた地名・宮都・陵墓・神社データベースを連動させている。平成三十一年三月までに二五一件の関連伝承地について公開予定。

⑧ 『古事記』絵画コンテストの開催

『古事記』の理解および日本文化への関心を促すことを目的のもと、第二回「古事記アートコンテスト」を開催した。前回同様、一般財団法人

人神道文化会と共催であり、本年度より高校生部門・大学生部門を設けた。全国の高校生・大学生・短期大学生から『古事記』に関する絵画・アート作品を募り、高校生部門は二三八点、大学生部門は九九点の作品の応募があった。審査員は谷口雅博、武田秀章、藤澤紫、松山文彦（一般財団法人神道文化会専務理事）、中野リョーコ（フリーデザイナー・イラストレーター）、近藤ようこ（漫画家）の六名であり、公正な審査のもと両部門の各賞が決定した。なお最終審査会は神道文化会の事務局が置かれる東京大神宮マツヤサロンにて行われた。本年度は両部門に特別審査員賞、高校生部門に団体賞が設けられることになった（詳細は本センターホームページ・SNSを参照）。表彰式は平成三十一年二月十日、若木タワー十八階の有栖川宮記念ホールにて執り行われた。なお、受賞作品は平成三十一年一月二十二日から本学博物館で展示している。



審査会の様子



高校生部門 特選

大学部門 特選

⑨ 『子ども古事記』試用版Web公開
『子ども古事記』については、現在作成中であり、挿絵は第一回古事記アートコンテスト受賞者が担当する。平成三十一年三月に「天地初発ノ神世七代」の範囲を公開予定である。

成果の公開について

研究事業の成果公開は、各種の事業計画に基づき随時行われる他、例年刊行している成果論集『古事記學』でも公開している。本年度で第五号となる同論集には、『古事記』註釈として、上巻「須賀の宮」から「八十神の迫害」までを掲載し、この他に平成二十九年度国際シンポジウムの講演録、皇學館大学連携研究会の成果となる三本の論考、Ⅲグループ主催研究会の論考、論考二本、敷田年治『古事記標注』翻刻、英訳『古事記』を掲載する。平成三十一年二月末日刊行予定。また、本センターホームページでも『古事記學』第五号の公開をする予定である。

（文責・渡邊 卓）

平成三十年度共存学公開研究会 「多文化共存をめぐる伝統と開発——中国と日本の事例から——」

本研究会は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会研究事業「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」・共存学グループの事業内容（平成二十九年年度まで）を継承し、本年度から「伝統文化・神社・地域と共存社会の研究」を実施する研究開発推進センター研究事業共存学グループの主催により、平成三十年十月十三日、AMC棟五階会議室〇六にて開催された。

開催趣旨は、伝統文化と共存する地域の諸課題について、中国と日本の事例から考えることにあり、奈良雅史氏（北海道大学准教授）、山本健太氏（本学経済学部准教授）による発題、黒澤直道氏（本学文学部教授）、菅浩二氏（本学神道文化学部教授）によるコメント、古沢広祐氏（本学経済学部教授）の司会による総合討議がおこなわれた。以下、当日の内容を報告する。

【発題一】奈良雅史氏「エスニック・ツーリズム開発に伴う民族間関係の変化——中国雲南省における回族社会の事例から——」

奈良氏は、観光客の来訪を歓迎しない傾向にあった回族が、近年、積極的に受け入れる傾向にある現状について、雲南省紅河州箇旧市沙甸区を事例に検討し、回族社会の観光に確認される民族間関係の変化を報告した。

変化の背景については、一九七八

年末からの改革・開放政策が進められる中で、一九八〇年代以降、中国国内旅行が発展し、八〇年代半ば以降には、各地に国家主導による民族テーマパークがつけられ、少数民族集住地域の観光開発がおこなわれたことに言及（民族観光）。回族集住地域の観光化は、特に二〇〇〇年代以降に活発化し、それまで非ムスリム・他民族に対して排他的な傾向にあった回族集住地域に観光客が訪れるようになったという。沙甸においては、二〇一〇年に建設された大モスクがあり、観光客対応の部門を設置して受入れ態勢を整え、イスラームやムスリムに対する誤解や無理解の解消を期待し、民族観光を自己表象の場にしたことを指摘。

また、こうした民族観光開発のみならず、一九八〇年代以降、回族のイスラームに関する活動が活発化しており、イスラームを実践しない回族をムスリムから排除する、「回族」と「ムスリム」の分化が見られると述べた。その一方で、回族のイスラーム信仰への志向という一見排他的な民族・宗教的あり方が、潜在的なムスリムと見做され得る他民族を受け入れる余地を広げ、その民族観光をしてイスラーム信仰を伝える場にしたという。以上の検討を踏まえ、観光開発によるゲスト・ホストの関係性が民族間関係を開かれたものにしていく可能性があることを示唆するとともに、最近ではモスクの人達と観光客の接する場が制限される状況もあることを指摘した。

【発題二】山本健太氏「伝統と文化の現代的諸相——西日本における神楽舞を事例に——」

山本氏は、日本の観光政策の現状、「地域の観光資源」（「域外者の需要がある「地域独自のもの」、「そこ」でしか経験できないもの」という観点等に言及した上で、西日本における幾つかの神楽舞を事例として、伝統と文化の現代的諸相をテーマに報告した。

まず、島根県江津市の石見神楽については、湯の町神楽殿を管理する有福温泉協会が出演依頼をおこなう、有福温泉神楽団が公演する事例を紹介し、神楽舞が観光資源として積極的に活用されている状況を指摘した。

は、競演会・神楽甲子園など、神楽に関する様々なイベントが実施されており、神楽ドームにおける毎週金土日の公演等、観光資源として活用されていること、歌舞伎・能の様式を取り入れた新舞の開発についても紹介した。

また、宮崎県日之影町の日之影神楽については、大楠集落の神楽保存会の人々が、大楠神社の例大祭（十二月第三土曜日）に神楽を奉納する事例を紹介。地域結束の場となる神楽の継承・保全活動に力を入れる一方で、観光資源として町外に広報することにはあまり積極的ではないことを述べた。そして高知県梶原町・津野町・仁淀川町の神楽については、それぞれ保存会があり、津野町では教育委員会が郷土愛教育に活用していることを紹介した。

最後に、キーパーソン・立地・アクセス等の条件にも言及し、神楽舞を観光資源として活用していく地域がある一方で、共同体維持のための伝統文化として継承・保全することに力を注ぐ地域、郷土愛を育むための教材とする地域など、様々な地域毎の特性があることが指摘された。

以上の発題を受けてコメントが為され、総合討議がおこなわれた。なお、本研究会の内容については、発題・コメント・全体討議の記録をまとめた、来年度刊行の『研究開発推進センター研究紀要』に掲載する予定である。

（文責・宮本誉士）



奈良雅史氏



山本健太氏

國學院大學博物館 特別展

「キリシタン―日本とキリスト教の469年―」

■開催に至る経緯

國學院大學博物館と西南学院大学博物館(福岡県福岡市)は、平成二十六年(二〇一四)七月に「西南学院大学博物館と國學院大學博物館との研究協力に関する協定書」を交換した。この協定は、共同研究計画に基づく特別展示・相互貸借展示や、これに伴う普及イベントを通して、教職員・学生の相互交流を促進し、研究・教育活動の充実を目指すものである。本展覧会は、同協定に基づく「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録記念事業として、東京会場・平成三十年(二〇一八)九月十五日(土)〜十月二十八日(日)、福岡会場・十一月二日(金)〜十二月十三日(木)の日程で実施した。

■開催概要

日本列島においては、在来のアニミズム的「神道」と、仏教をはじめとする外来宗教が、時に相互の独自性を主張しつつも、緩やかに併存・融合してきた。かかる日本に、天地の創造主を崇めるキリスト教が伝来したのは、天文十八年(一五四九)のことである。しかし、豊臣秀吉が最初の伴天連追放令を布いた天正十五年(一五八七)年以降、徐々にキリスト教の布教に制限が加えられていった。そして、キリシタンたちは、江戸幕府の禁教令や、島原・天草一揆などが進展する中で、潜伏し

て信仰を守るか、棄教するかを選択せざるを得なくなっていく。その後、再び公の布教が可能となるまでには、明治維新を経て暫くの時を要したのである。この展覧会では、海外から流入する諸文化を換骨奪胎してきた日本に、如何にしてキリスト教が根を下ろそうとしてきたのか、その歩みを辿った。そこでは、受け入れる立場にあった日本側の試行錯誤も見出すことができるのである。

■展示概要

序章…日本宗教の重層性 日本列島においては、三世紀から始まる国家形成の歩みと共に神道が定型化し、朝鮮半島を経て六世紀に伝来した仏教や、中国由来の道教的風習などを取り入れつつ、今日に至る重層的宗教文化が育かれた。そこでは、アニミズム的世界観を背景として、諸宗教が緩やかに共存しており、「草木国土悉皆成仏」といった思想も広く受け入れられてきたのである。十六世紀に伝来したキリスト教は、このような日本の風土と向き合うことになった。

第一章…キリスト教の伝来と普及 十五世紀半ばからの大航海時代には、スペインやポルトガルを中心とする欧州諸国が、アフリカ・アジア・アメリカに勢力を伸ばした。また、十六世紀前半に提起された宗教改革の影響を受けて、イエズス会を

先駆けとする諸修道会が、非キリスト教圏への宣教を積極化する。日本においても、西国の諸大名のみならず、一般民衆にもキリスト教が普及した。また、はじめて出会う西方の風俗は、日本で作られた工芸品の意匠にも影響を与えた。

第二章 禁教政策の展開 順調に進んできたキリスト教の布教は、キリシタン大名による領民の強制改宗や、神社仏閣の破壊を見咎めた豊臣秀吉が、宣教師(伴天連)追放を宣言した天正十五年から、徐々に潮目が変わっていく。日本の文化に疎い後発修道会の振る舞いも、宣教の困難に拍車をかけた。続く徳川幕府は、暫くキリスト教を黙認していたが、キリシタン大名が関与した岡本大八事件や、天草・島原一揆を経て、禁教政策を本格化させていった。

第三章 キリスト教解禁への道程 慶長の禁教令から約二五〇年。十九世紀後半になると、開国・開港が進む。長崎では、元治二年(一八六五)に信徒が「発見」されたが、ほどなく彼らの信仰が露見し、浦上四番崩れを引き起こす。幕府が倒れた後も、キリシタン厳禁の高札が撤去された明治六年(一八七三)まで禁教が続いた。また、外交・内政上の問題から、キリスト教をはじめとする宗教の自由については議論が続く。明治憲法に明文化された宗教の自由も、あくまで制限的なものであった。

終章 「潜伏キリシタン」の伝統 禁教によって司牧者を失ったキリシタンは、棄教するか、潜伏しながら

自らの信仰を守り続けるかの選択を迫られた。後者の「潜伏キリシタン」は、洗礼の秘跡や、典札の形を維持しつつ、在来の神仏信仰に擬態することで生き永らえていく。度重なる崩れを経験してきた「潜伏キリシタン」の後裔には、解禁後にカトリック教会へ帰参した人々のほか、先祖代々の信仰を守り続けた「カクレキリシタン」があり、その伝統を今日に伝えている。

■関連イベント

シンポジウム「島原・天草一揆とその後」(十月六日) 登壇者…木村直樹(長崎大学)「島原・天草一揆と牢人」、大橋幸泰(早稲田大学)「諸藩による島原天草一揆の記録と記憶」、安高啓明(熊本大学)「踏絵の変容と潜伏キリシタン」

シンポジウム「考古学が明かす新たなキリシタン像」(十月十三日) 登壇者…深澤太郎(國學院大學)「日本における宗教考古学とキリスト教」、今野春樹(東京藝術大学)「キリシタン考古学の枠組み」、大石一久(大浦天主堂キリシタン博物館)「天正遣欧使節と千々石ミゲル」

特別講義「生月島のかくれキリシタン」(十月二十七日) 講師…中園成生(平戸市生月町博物館・島の館) ミュージアムセッション「島原・天草一揆と禁教」(十二月八日) 登壇者…木村直樹(長崎大学)「島原・天草一揆と牢人」、安高啓明(熊本大学)「踏絵の実態と禁教認識の伝播」

(文責・深澤太郎)

國學院大學博物館 企画展 「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」

はじめに

國學院大學博物館で行われた企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」(会期：平成三十年十一月三日～平成三十一年一月十四日)は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」の一環として、科学研究費・

基盤研究(S)「宗教テクスト遺産の探査と総合的研究―人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」(代表：阿部泰郎)の補助を受けて行われた。

同科学研究費を除く、連携館・機関は次の通りである。

- ・ 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
- ・ 国立歴史民俗博物館
- ・ 国文学研究資料館
- ・ 国際日本文化研究センター
- ・ 神奈川県立歴史博物館
- ・ 神奈川県立金沢文庫
- ・ 名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター

連携館のうち、国文学研究資料館は特別展示「祈りと救いの中世」(平成三十年十月十五日～十二月十五日)、神奈川県立歴史博物館は特別展「鎌倉ゆかりの芸能と儀礼」(平成三十年十月二十七日～十二月九日)、神奈川県立金沢文庫は特別展

「顕われた神々―中世の霊場と唱導―」(平成三十年十一月十六日～平成三十一年一月十四日)を行った。

國學院大學博物館における展示は、学術資料センター(神道資料館部門)で進めている研究事業「神道祭祀・儀礼の研究と展示公開」の成果として行ったものである。

展示趣旨

古代から、日本列島各地では、神々に食べ物や捧げ物を奉り、豊かな稔りや人々の幸せを祈り感謝する祭祀・儀礼が行われてきた。

十世紀に作られた法制書である『延喜式』には、祈年祭(二月)、広瀬大忌祭・龍田風神祭(四月・七月)、新嘗祭(十一月)といった国家が行う祭祀についての詳細な記述がある。これらは、稲作に関わるもので、その豊かな稔りを祈ること、生活の平安を祈ることも通じていた。

また、天皇が即位すると、十一月に大嘗祭を行い、毎年の新嘗祭と同じく、天皇自ら神々に食物などを捧げた。

本展では、祈年祭・新嘗祭・大嘗祭を中心に、稲作のサイクルと国家祭祀との関わりを取り上げる。

概要

企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」は「稲と神話」「祈

年祭「夏の祭り」「新嘗祭」「大嘗祭」「神社の祭祀」の六章で構成した。

主な展示資料は

- ・ 『日本書紀』(嘉禎本)(國學院大學図書館)
- ・ 『神祇官図』(國學院大學博物館)
- ・ 『令義解』(猪熊本)(國學院大學図書館)
- ・ 『延喜式』卷八(卜部兼永筆)(國學院大學図書館)
- ・ 『御田植・巫女舞図屏風』(國學院大學博物館)
- ・ 『大嘗会記』(天仁元年)(国立歴史民俗博物館)
- ・ 近世の大嘗宮模型(國學院大學博物館)

である。

特集展示「祈年の法会と神々」では、修正会・修二会・オコナイなどで読み上げられる神名帳を取り上げた。主な展示資料は、

- ・ 『金龍寺 修正会神明帳』(国立歴史民俗博物館)
 - ・ 『恒例修正月勤請神名帳』(國學院大學図書館)
- である。
- 二つの展示を合わせてリーフレット(カラー・十六頁)を博物館にて販売した(販売終了)。

関連事業

本展示の関連事業として、ミュージアム・トーク、講演会を行い、また、本年度の公開学術講演会とも連携した。

十一月十七日の研究開発推進機構公開学術講演会では、岡田莊司氏(國學院大學教授)が「古代と近代

の大嘗祭と祭祀制」(公開学術講演会の概要は一〇二面を参照)の演題で、十二月二十二日に行われた「列島の祈り」講演会では、斎藤英喜氏(佛教大学教授)が「昭和三年の大嘗祭と折口信夫」の演題で、それぞれ講演した。

ミュージアム・トークは十一月十七日・十二月二十二日に木村大樹・塩川哲朗両氏(ともに國學院大學研究開発推進機構PD研究員)が「資料から見た大嘗祭」、十二月十五日に笹生衛氏(國學院大學博物館館長・國學院大學教授)が「古代の大嘗祭・大嘗宮の実態と原形」、平成三十一年一月十二日に大東敬明(國學院大學博物館准教授)が「祈年の法会に招かれる神々」の題で行った。

関連展示

「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」に先駆けて、國學院大學博物館では、同事業の一環として特集展示「舞楽」(平成三十年九月十五日～十月二十八日)を行った。関連行事として、九月二十九日に講演会「東アジアの文化交流と舞楽」を行い、荒見泰史氏(広島大学教授)が「シルクロードの響きと躍動」、松尾恒一氏(国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院大学教授)が「浄土の飛翔、荘嚴の世界―隋唐の宮廷舞踊・音楽の日本への伝来と変容―」を演題として講演した。

(文責：大東敬明)

平成三十年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

平成三十年度は、博物館の展示公開として、特別展三回、企画展四回、特集展示を十一回開催した。また、各展示と連動した企画・イベントの実施、常設展の展示パネル・キャプションの一部リニューアル、公開承認施設を旨とした展示環境改善の取り組みや、ミュージアムショップの開設等を行った。

二、展示公開(表1)

【特別展】

・特別展「狂言―山本東次郎家の面―」(展示図録刊行)、会期：平成三十年五月二十六日～七月八日。主催：國學院大學、大藏流狂言山本会。

・特別展「キリシタン―日本とキリスト教の469年―」(展示図録刊行)、会期：平成三十年九月十五日～十月二十八日。主催：当館、西南学院大学博物館。

・特別展「神に捧げた刀―神と刀の二千年―」(展示図録刊行)、会期：平成三十一年一月二十二日～三月十六日。主催：当館、協力：鹿島神宮・北澤八幡神社・久能山東照宮・鶴岡八幡宮・箱根神社(五十音順)。

【企画展・特集展示】

・企画展「國學院大學図書館 春の特別列品―久我家の明治維新―」、会期：平成三十年四月十九日～五月二十日。主催：当館、國

表1 平成30年度 展示内容と関連事業

展示(会期)	関連事業
特別展 狂言―山本東次郎家の面― (H30.5/26-7/8)	講演会 5/26 特別展「狂言―山本東次郎家の面―」講演会 山本東次郎(大藏流狂言方)、近藤ようこ(漫画家)
	Event 6/29 山本東次郎家による面のかけ方・装束のつけ方
	シンポジウム 10/6 島原・天草一揆とその後 木村直樹(長崎大学教授)「島原・天草一揆と平人」大橋幸彦(早稲田大学教授)「藩政による島原・天草一揆の記録と記憶」安高啓明(熊本大学教授)「藩政の変容と近代キリシタン」10/13 考古学が明かす新たなキリシタン像 深澤太郎(本学准教授)「日本における宗教考古学とキリスト教」今野春樹(東京藝術大学講師)「キリシタン考古学の枠組み」大石久(大浦天主堂キリシタン博物館)「天正遣欧使節と十ヶ石ミゲル」
	特別講義 10/27 生月島のかくれキリシタン 中国成生(平戸市生月町博物館・島の館)「生月島のかくれキリシタン」
	Museum Session 12/8 島原・天草一揆と禁教 ※福岡会場 木村直樹「島原・天草一揆と平人、安高啓明「踏絵の実態と禁教認識の伝播」
特別展「神に捧げた刀―神と刀の二千年―」 (H31.1/22-3/16)	Museum Talk 1/26 笹生衛(当館館長・本学教授)「刀の神と神の刀」2/9 笹生衛、吉永博彰(本学助教)「中世東国武士の神社信仰と刀剣」2/23 原田一敏(ふくやま美術館 館長・東京藝術大学名誉教授)「神に捧げた刀」3/2 内川隆志(当館副館長・本学教授)、黒沢義文(刀剣研究家)「愛しき刀―その歴史と扱い―」
	Special Museum Talk 4/27 古山悟由(本学図書館職員)、5/12 古山悟由
企画展 國學院大學図書館 春の特別列品―久我家の明治維新― (H30.4/19-5/20)	Museum Talk 7/14 内川隆志「ミュージアムトーク」、7/21 下津谷達男(國學院大學木短期大学元教授)「今しか聞けないノ項の話」、8/25 笹生衛「種輪を語る」、9/1 内川隆志「勾玉を語る」
	講演会 11/17 國學院大學 研究開発推進機構 公開学術講演会 岡田耕司(本学教授)「古代と近代の大嘗祭と祭制」、12/22 企画展「列島の祈り」講演会 斎藤美喜(佛教大学教授)「昭和三年の大嘗祭と折口信夫」
	Museum Talk 11/17 木村大樹・堀川哲朗(本学研究開発推進機構PD研究員)「資料から見た大嘗祭①」、12/15 笹生衛「古代の大嘗祭・大嘗宮の実態と原形」、12/22 木村大樹・堀川哲朗「資料から見た大嘗祭②」、1/12 大東敬明(本学准教授)「祈年の法会に招かれる神々」
特集展示 平成31年度 春の特別列品 武士を描くものがたり―比べてみる軍記の世界― (H31.3/21-4/21)	Museum Talk 6/9 福原敏男(武蔵大学教授、本学大学院兼任講師)「最後の天下祭―文久二年の山王祭」
	Museum Talk 7/7 藤澤紫(本学教授)「悪は美しい」、7/28 深澤太郎「悪になれ」
	講演会 9/29 東アジアの文化交流と舞楽 大東敬明「趣旨説明」、荒見泰史(広島大学教授)「シルクロードの響きと躍動」、松尾恒一(国立歴史民俗博物館教授・総合研究大学院大学教授)「浄土の飛翔、莊嚴の世界―隋唐の宮廷舞踊・音楽の日本への伝来と変容―」
	有栖川宮家・高松宮家ゆかりの新収蔵品展 (H30.10/5-10/22)
	明治150年記念 明治日本における伝統と近代 (H30.10/23-12/2)
	國學院大學考古学研究室 発掘調査速報展示Ⅲ 縄文人と縄文文化の起源を探る―居家以岩陰遺跡の発掘調査2018― (H30.11/2-12/2)
	祈年の法会と神々 (H30.11/3-H31.1/14)
	Museum Talk 12/8 下坂守(京都国立博物館名誉館員)「巻子本那智参詣曼荼羅の位置づけをめぐって―人物画像を中心に」、12/15 早川泰弘・城野誠治(東京文化財研究所)「光学的調査の方法と成果」
	古事記アートコンテスト 受賞作品展 (H31.1/22-3/16)
	最後天下祭―文久二年の山王祭― (H30.5/26-6/26)
教派神道と皇典講究所・國學院大學 (H30.5/26-7/8)	
悪―まつろわぬ者たち― (H30.6/1-8/12)	
色と文様―朝廷に納めた色鮮やかな装束の控装束 (H30.6/27-7/8)	
舞楽 (H30.9/15-10/28)	

學院大學図書館。
・開館九十周年記念企画展「日本文化の淵源を求めて―考古学陳列室から國學院大學博物館まで―」(展示図録刊行)、会期：平成三十年七月十四日～九月九日。主催：当館。
・企画展「列島の祈り―祈年祭・新嘗祭・大嘗祭―」(展示リーフレット刊行)、会期：平成三十年十一月

三日～平成三十一年一月十四日。詳細については、十二頁を参照。
・企画展「國學院大學図書館 春の特別列品 武士を描くものがたり―比べてみる軍記の世界―」、会期：平成三十一年三月二十一日～四月二十一日。主催：当館、國學院大學図書館。
・特集展示については表1を参照。
三、教育普及
教育普及事業では、展示公開事業と連動したミュージアムトーク、シンポジウム、講演会等を実施した(詳細は表1を参照)。

四、環境整備・営繕
環境整備・営繕として、館内展示ケースの点検整備および修繕を行った。また、展示空間の空気質・温湿度を良好なレベルに維持させるための施策を行い、資料保護・管理運営の質的向上を図った。
五、運営支援
本年度よりミュージアムショップを開設し、図録やグッズの販売を実施した。また、当館ウェブサイト開設している寄付募集ページやイベント時の配布資料等で寄付を募り、館の運営資金の確保を目指した。その他、昨年度に引き続き英語による情報発信、館内展示解説の多言語化を促進し、外国人来館者の集客を図った。

本年度の入館者数は、平成三十一年一月末日現在、五万八千人を超え、前年度の入館者数を上回る見込みである。今後も本学の研究・学術資料の公開を中心に、国内外の多くの方々にご活用いただける博物館運営を目指していく。
(文責：國學院大學博物館)

表2 平成30年度入館者数

月	(名)
4月	4,292
5月	4,038
6月	7,418
7月	5,728
8月	7,749
9月	4,398
10月	8,813
11月	6,289
12月	4,325
1月	5,424
合計	58,474

平成31年1月末日現在

彙報

会議

○全体

- ・平成三十年度第二回運営委員会
平成三十年十月十一日(木) 十六時～十六時二十五分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成三十年度第三回運営委員会
平成三十年十一月八日(木) 十六時十分～十七時十分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成三十年度第二回企画委員会
平成三十年七月十一日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第三回企画委員会
平成三十年十月十日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第四回企画委員会
平成三十年十月三十一日(水) 十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第五回企画委員会
平成三十一年一月十六日(水) 十一時～十一時二十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第二回人事委員会
平成三十年十月二十三日(火) 十二時十五分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第三回人事委員会
平成三十年十一月七日(水) 十二時十五分～十二時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第四回人事委員会
平成三十年十一月九日(水) 十三時三十分～十四時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第二回教員等資格審査委員会
平成三十年十月二十三日(火) 十二時三十分～十三時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第三回教員等資格審査委員会
平成三十年十一月七日(水) 十二時三十分～十三時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第四回教員等資格審査委員会
平成三十一年一月九日(水) 十四時～十四時三十分、A M C棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・平成三十年度第二回所員会議、平成三十年七月四日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第三回所員会議、平成三十年九月二十七日(木) 十時三十分～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第四回所員会議、平成三十年十一月七日(水) 十一時～十一時三十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成三十年度第五回所員会議、平成三十一年一月九日(水) 十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

○学術資料センター

- ・平成三十年度第二回学術資料センター会議、平成三十年九月二十六日(水) 十時三十分～十一時、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成三十年度第三回学術資料センター会議、平成三十年十二月十二日(水) 十時三十分～十時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

- ・平成三十年度第二回校史・学術資産研究センター会議、平成三十年九月二十七日(木) 十二時～十二時三十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○研究開発推進センター

- ・平成三十年度第二回研究開発推進センター会議、平成三十年九月二十五日(火) 十四時三十分～十五時、A M C棟五階会議室○六

○國學院大學博物館

- ・平成三十年度第二回國學院大學博物館会議、平成三十年九月二十六日(水) 十一時三十分～十一時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成三十年度第三回國學院大學博物館会議、平成三十年十二月十二日(水) 十時四十五分～十時五十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○古事記学センター

- ・平成三十年度第一回古事記学研究実施委員会、平成三十年六月七日(木) 十六時～十七時、若木タワー四階会議室○五
- ・平成三十年度第二回古事記学研究実施委員会、平成三十年十一月八日(木) 十六時十分～十七時、若木タワー四階会議室○五

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

- 全体
・國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会「古代と近代の大嘗祭と祭祀制」、平成三十年十一月十七日(土) 十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、講師 岡田莊司(國學院大學教授)

○日本文化研究所

- ・平成三十年度第一回国学研究ブラットフォーム公開レクチャー「国学と復古―光格天皇以後―」、平成三十年九月二十一日(金) 十八時三十分～二十時、A M C棟五階会議室○六、講師 一戸涉(慶應義塾大学准教授)
- ・国際研究フォーラム「アジアの宗教文化―モダニティの中の相互変容―」、平成三十年十月二十日(土) 十時～十八時二十分、A M C棟五階会議室○六、発表 ライオンハルト・ツェルナー(ボン大学教授)、三浦隆司(アリゾナ大学助教)、黄約伯(中央研究院助研究員)、デーヴィッド・ヴァイス(立教大学助教)、西田彰一(日本学術振興会特別研究員P D)、高瀬航平(東京大学大学院博士課程)、マテヤ・ジャビェク(筑波大学大学院博士課程)、ゲエン・トウ・ハン(ハノイ国家大学講師)、阿部哲(長崎大学コーチングフェロー)、伍嘉誠(長崎大学助教)、ムン・ビョンジュン(ソウル大学大学院博士課程)、齋藤公太(國學院大學助教)、司会 櫻井義秀(北海道大学教授)
- ・宗教文化教育に関する研究会、平成三十年十二月一日(土) 十四時～十八時、A M C棟五階会議室○六、発表 飯嶋秀治(九州大学准教授)、岡田正彦(天理大学教授)、櫻井義秀(北海道大学教授)、宮本太郎(関西大学教授)

○校史・学術資産研究センター
 ・「南信州民俗芸能フォーラム in 國學院」遠山霜月祭(和田) | 國學院大學折口博士記念古代研究所(共催)、平成三十年十一月十日(土) 十二時~十七時三十分、AMC棟一階常磐松ホール

○研究開発推進センター

・平成三十年度第一回共存学公開研究会「多文化共存をめぐる伝統と開発―中国と日本の事例から―」平成三十年十月十三日(土) 十四時~十七時三十分、AMC棟五階会議室○六、事例報告 | 奈良雅史(北海道大学准教授)、山本健太(國學院大學准教授)、コメント | 黒澤直道(國學院大學教授)、菅浩一(國學院大學教授)、司会進行 | 古沢広祐(國學院大學教授)

○古事記学センター

・国際シンポジウム「古事記と国家の形成―古代史と考古学の視点から―」平成三十年十一月三日(土)~十一月四日(日)、宮崎県西都市、パネリスト | 谷口雅博(國學院大學教授)、サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所総括役所長)、笹生衛(國學院大學教授)、佐藤長門(國學院大學教授)、コメント | 李永植(仁済大 学校教授)、デイスカッサント | 長友安隆(青島神社宮司)、デイスカッサン司会 | 山崎雅稔、総合司会 | 渡邊卓

出張

○日本文化研究所

・齋藤公太・丹羽宣子・原田雄斗、「近世・近代の国学・神道関係人物に関わる一次資料の調査のた

め」平成三十年八月二十五(土)~八月二十六日(日)、三重県伊勢市・愛知県西尾市

○学術資料センター

・深澤太郎、「長崎市諫早市近世キリシタン墓の調査」のため、平成三十年六月十九日(火)~六月二十日(水)、長崎県諫早市
 ・深澤太郎、「被災地の現状と女川三十三観音の保存状況に関する調査」のため、平成三十年八月二十七日(月)~八月二十八日(火)、宮城県牡鹿郡女川町
 ・深澤太郎・尾上周平、「陸奥金華山信仰関連石造物の補足調査」のため、平成三十年十一月二十七日(火)~十一月二十九日(木)、宮城県石巻市
 ・深澤太郎・尾上周平、「伊豆半島に伝世する平安期仏像調査」のため、平成三十年十二月八日(土)、静岡県下田市

○校史・学術資産研究センター

・渡邊卓・高野裕基、「全国大学史資料協議会2018年度総会ならびに全国研究会参加」のため、平成三十年十月十日(水)~十月十二日(金)、福岡県福岡市

○研究開発推進センター

・大東敬明、札幌まつり調査のため、平成三十年六月十五日(金)~六月十六日(土)、北海道札幌市
 ・宮本誉士・大東敬明、北海道神宮所蔵資料調査のため、平成三十年九月五日(水)、北海道札幌市
 ・古沢広祐・茂木栄・高橋雄一、岩手県における東日本大震災被災地の復興に関する現地調査のため、平成三十年九月二十二日(土)~九月二十四日(月)、岩手県上閉

伊郡大槌町
 ・宮本誉士、霧島神宮関連資料の調査のため、平成三十年十二月二十三日(日)~十二月二十五日(火)、鹿児島県鹿児島市・霧島市

○國學院大學博物館

・深澤太郎・尾上周平、「西南学院大学博物館における相互貸借特集展示の撤収・設営、南島原市におけるキリシタン遺跡と石造物の踏査」のため、平成三十年六月二十六日(火)~六月二十八日(木)、福岡県福岡市、長崎県南島原市

・深澤太郎、「特別展『キリシタン』実施に係る資料の集荷」のため、平成三十年九月三日(月)~九月五日(水)、長崎県南島原市、熊本県天草市・熊本市、福岡県福岡市
 ・深澤太郎、「特別展『キリシタン』実施に係る資料の返却」のため、平成三十年十月一日(木)~十月十二日(金)、福岡県福岡市
 ・深澤太郎、「特別展『キリシタン』実施に係る資料の運搬・展示」のため、平成三十年十月三十日(火)~十一月二日(金)、福岡県福岡市

・内川隆志・及川聡・吉永博彰、「平成三十年度特別展『神に捧げた刀』に関する打合せ」のため、平成三十年十一月九日(金)、静岡県静岡市
 ・内川隆志・深澤太郎、「特別展『キリシタン』実施に係る資料の撤収・返却」のため、平成三十年十二月十三日(木)~十二月十八日(火)、福岡県福岡市

○古事記学センター

・渡邊卓、「古事記」神話遺跡地の調査及び現地研究者との意見交換のため、平成三十年八月十七日(金)~八月十九日(日)、島根県

松江市・出雲市
 ・笹生衛・平藤喜久子・渡邊卓、木村大樹(学術資料センター)、「國學院大學古事記学センター、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所共催ワークショップ『Myth and Ritual in Ancient Japan 古代日本の神話と儀礼』」に出席のため、平成三十年九月十六日(日)~九月二十三日(日)、アメリカ合衆国マサチューセッツ州 ボストン・ケンブリッジ

・石井研士・谷口雅博・佐藤長門・笹生衛・山崎雅稔・根岸茂夫・岩瀬由佳・小川直之・武田秀章・平藤喜久子・藤澤紫・松本久史・宮本誉士・渡邊卓・上西亘・井上隼人・高橋俊之・佐藤亮介・中山陽介・山口輝幸・小平浩衣、国際シンポジウム「古事記と国家の形成―古代史と考古学の視点から―」及びエクスカーシヨンのため、平成三十年十一月一日(木)~十一月四日(日)、宮崎県西都市

刊行物

○全体
 ・研究開発推進機構「機構ニュース」通号二十三(平成三十年六月二十五日発行)

○日本文化研究所

・國學院大學日本文化研究所編「日本研究所年報」第十一号(平成三十年九月三十日発行)

○学術資料センター

・國學院大學学術資料センター編「資料で見る大嘗祭」(平成三十年十一月十七日発行)

資料紹介

大嘗会御神殿絵図



「大嘗会御神殿絵図」（以下、本図）は、図右上部にも記されている通り、元文三年（一七三八）十一月十九日に行われた桜町天皇の大嘗祭における大嘗宮の様子を描いた資料である。

大嘗祭は、文正元年（一四六六）の後土御門天皇の時を最後に、応仁の乱を始めとする戦乱のため、二百二十年にわたり中断した。その後、貞享四年（一六八七）の東山天皇の時に略儀ながら再興し、次々代の桜町天皇の時に、本格的な再興を果たしたのである。

平安時代の『儀式』に規定されたような古代以来の大嘗宮と、本図の描く近世の大嘗宮とは、いくつかの相違点がある。最も大きな違いは、古代の大嘗宮が国家政務を行う施設である朝堂院の大極殿前庭に造営されたのに対して、近世には天皇の居所である内裏の紫宸殿前庭（南庭）に造営されたことである。それに伴って、天皇が神事前の潔斎を行う控えの場とする廻立殿も、古代は大嘗宮の北方に建てられたが、近世には紫宸殿の東方北寄りに避けて建てられることとなった。

また、古代の大嘗宮は、天皇が神事を行う悠紀殿・主基殿だけでなく、神の廁である御廁、そして神饌（神に供える食事）の準備・調理を行う膳屋や臼屋といった殿舎群全体が、柴垣によって囲まれ、外界から遮蔽されていた。これに対して本図の大嘗宮柴垣内に建つ殿舎は悠紀殿・主基殿のみである。御廁は建てられず、膳屋は月華

門（紫宸殿前庭の西門）の南北にそれぞれ設けられている。

寛政二年（一七九〇）の内裏造替により、前庭全体を取り囲む回廊が、平安宮の復古様式で新設されると、以降の大嘗祭では膳屋が柴垣外の東西に建てられるところとなった（國學院大學博物館所蔵「嘉永元年大嘗会図」など参照）。神饌が神事の場と同様に、聖別された区域内で準備されるという古代の本来的な形式は、近世には変容したことになる。

本図をみると、廻立殿から悠紀殿にかけて、天皇の御路となる筵道・白布が敷かれている。また日華門（前庭東門）の南側に設けられた釜殿では、竈の火を焚いて湯を沸かしている。亥一刻（午後九時頃）からの悠紀殿の儀を控えた天皇が、廻立殿での潔斎（湯あみ）を行う直前の様子を描いたものと推察できよう。

また、柴垣内の東南および西南の隅には八脚案（机）が置かれている。天皇が悠紀殿に出御すると、案に置かれた神饌や手水具を官人・女官らが捧げ持つて並び、悠紀殿まで運び入れる「神饌行立」の儀が行われた。

なお、桜町天皇大嘗祭の詳細な様子は、国学者の荷田在満が同年に幕府の命令で著した『大嘗会儀式具釈』や、その翌年に簡約版として版行した『大嘗会便蒙』に記されている。本図の描写は両書の記述と基本的に対応している。

（文責・木村大樹）